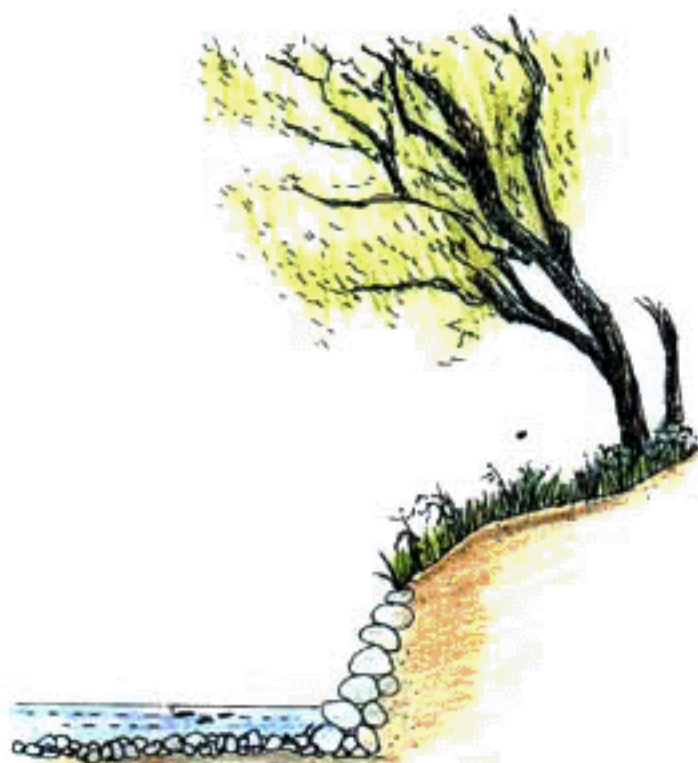


## ●自然素材を使った護岸の方法

近年、木材や石材などの身近な自然素材を用いる我が国の伝統的な護岸工法が見直されてきています。自然素材を用いる工法では、コンクリートや鋼材による近代的河川工法に比べ、変化に富んだ良好な水辺空間を生みだせるためです。積み重ねられた石や木の間にできた隙間には、草が生えることができます。また水中の石のすき間は、魚に隠れ家や産卵場を提供します。

すき間に生えた木々は成長すると網目状に根を張り、護岸の強度や耐久性が上がります。また、溪岸の植生は水面に木陰をつくったり、葉を落とすことなどによって生物の良好な生息環境を形成することとなります。



空石張護岸 石を組んだだけの空石張護岸はすき間が多いため、小魚のかくれ場所として有効である。陸上に出た部分も、同様に多くの生きものに生息環境を提供する。しかし河原や河床に、空石張りに適した大きさの石が少ない下流域等では、本工法による整備はなじまない。



覆土護岸 フトンかご等により護岸された場所では、フトンかごの上から覆土し、植栽することで植生の回復を促すことができる。



柳枝工 幹や枝が柔らかいヤナギ類は、洪水時に水圧で岸辺の洗掘を防ぐ効果がある。柳枝工にはヤナギの枝を束にして組んだり、栗石などの間に挿し木を行う方法などがある。

(写真提供：新潟県粗朶業共同組合)

